
学園黙示録 一最後の願い一

神威玲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 ―最後の願い―

【コード】

N3301T

【作者名】

神威玲夜

【あらすじ】

俺の最後の願い、俺が死んでも・・・
君が強く生きられますように・・・

(前書き)

神威の学黙短編第2弾！

感想などくれたら作者は泣いて喜びます！

この壊れてしまった世界で

大事な人のために

俺は何ができたのだろうか・・・？

陸斗SIDE

俺達は【奴ら】の巣窟となった学校から
脱出するために廊下を走っていた。

「ここにもいる！どうするの！？」

『お前は逃げる！俺がひきつけるから！』

「何で？一緒に逃げるって言ったじゃない！」

『お前には死んで欲しくないんだ、だから早く！』

俺はそう言い、大事な人を逃がすために

【奴ら】の前に立って叫んだ。

『こつちだ！餌はこつちだぞ！』

それにつられて何匹かの【奴ら】が俺に向かつて歩み寄ってくる。

それを横目に見ながら俺は

大事な恋人、波戸由菜なみとゆなを

半ば無理やりに廊下の窓の外に押し出した。

「陸斗！行かないで！行っちゃだ！」

『わがまま言うな！お前だけでも生きる！』

俺はそう言うつと窓を閉め、鍵をかけた。

窓の外からは由菜の声が聞こえてくるが

無視して【奴ら】を引き寄せるために

さらに大声を出しながら窓とは違う方向へ走った。

（お前には・・・生きていて欲しいから・・・）

俺がさつき出した大声でさらに【奴ら】の数が増えていく。

それでも俺は大声を出すのをやめなかった。

『ほらほら！こつちだぜ！』

そう言いながら俺は廊下を駆けた。

その間にも上の階や同じ階の教室から何匹もの

【奴ら】が現れ数を増やしていく。

（あいつらが俺だけを狙ってくれば由菜には行かないはずだ！）

俺は途中の窓を手に持っていたバットで叩き割ると
その窓から校庭に出た。

(由菜は逃げきれたのか・・・？)

俺は不安だった、あいつは俺がいないと何もできない
さっきは仕方なかったとはいえ、一人にしてしまったのだ。
由菜を逃がした場所に向かって俺は走り出した。
そうして俺は由菜を逃がした場所に向かう途中
校舎と校舎の間の道に【奴ら】が集まっているのを見た。

その時

「いやあああ！来ないでえ！助けて！陸斗お！」

そこから聞こえてきたのは他でもない
俺の大切な由菜の声だった。

『 由菜！そこにいるのか！ 』

「 陸斗！？助けて！ 」

俺は【奴ら】が何匹も集まっている場所に
走りよりバットで【奴ら】を吹き飛ばした。
それでも由菜の場所までが遠い。

「 いやあ！来ないで！来ないでよお！ 」

『 くそっ！どけよ！お前らあ！ 』

俺は叫びながら【奴ら】の群れに特攻した。そして何匹かの頭を叩き潰し、吹き飛ばしやっとなんかの姿が見えた。

しかしそこには今にも由菜に襲い掛かろうとしていた一匹の【奴ら】がいた。

それを見た瞬間、俺は走り

由菜と【奴ら】の間に飛び込んだ。

「アアアアアアアア・・・アアア」

「いやあああああああああ！」

間に合ってくれ・・・！

ガブツ！

由菜は何が起きたかわからないようすで俺を見ていたが、俺の腕に【奴ら】が噛み付いているのを見てへたり込んだ。

『くっ・・・！由菜・・・大丈夫か・・・？』

「私は大丈夫だけど、陸斗が・・・」

『俺は大丈夫・・・だ！』

俺はそう言つと噛み付いていた【奴ら】に
バットを叩きつけ、腕から離れたのを見ると
その顔に向けてバットを叩き込んだ。

ドガッ！グシヤッ！

俺は殺した死体を蹴つ飛ばすと
そのまま座り込んだ。

『ふう……これでとりあえずは大丈夫だな……』

「ねえ……？腕大丈夫なの……？」

由菜は俺にそう聞いてきた。

俺は噛まれた人間がどうなるかを知っていたが
知らない由菜には嘘をついた

『ああ……大丈夫だ、少し痛むけどな』

「ほんとに、ほんと……？」

『ああ、ほんとだよ』

俺はそう言い、由菜の頭を撫でながら
立ち上がるうとした。

グラッ ドサッ！

『あ……っ？』

「どうしたの？大丈夫？」

『・・・・・・・・』

（あれ・・・？何で声が・・・）

それを期に俺の意識が何かによって消されていく感じがしてきた。

ドクンツ！ドクンツ！

（まさか！もう・・・なのか！）

「陸斗・・・？り・・・と！」

由菜が何かを言っているが

よく聞こえず、何かが俺を蝕んでいく

それでも俺は無理やりにも

由菜に向けて最後になるであろう言葉を紡いだ。

『お・・・れが・・・もし・・・【奴ら】に

なったら・・・これで・・・殺して・・・くれ・・・』

そして手に持っていたバットを手渡すと

俺は地面に倒れこみ、血を吐いた。

どうみても助からない失血量

消えていく意識の中、俺は

由菜が俺を追って死なない事を望みながら

迫り来る闇に飲まれていった。

陸斗SIDEエンド

由菜SIDE

陸斗に地面に倒れたくさん血を吐いていた。
私はそれを見ながら何もできなかった。
そのままの状態で何分たったのか
倒れていた陸斗がゆっくりと痙攣しだし
動き出そうとしていた。

「陸・・・斗？」

私は陸斗が起きてくれたのかと思って
近づいたが、様子がおかしい。
そして私の方を向いた陸斗の顔を見て
私は絶叫した。

「いやあああああああ！！！！！！」

陸斗は【奴ら】と化していた。
私の声によつて”陸斗”が近づいてくる
そして襲われそうになった時。
私の頭の中に声が聞こえた。

お・・・れが・・・もし・・・【奴ら】に
なったら・・・これで・・・殺して・・・くれ・・・

そう、それが陸斗の最後の望みだった。
だから私は手にしたバットを”陸斗”に向けて
振り上げ、何かを振り払うように振り下ろした。

グシャ！

陸斗の体が地面に倒れていく
それを見て私は狂ってしまったのだろうか。
こう思った。

彼の傍で死にたいと。

そして私はバットを振り上げ
自分の頭に向けて振り下ろした。

そして私の意識も深い眠りに落ちていった・・・

(後書き)

楽しんでいただけましたでしょうか？

大好きな人に殺される・・・嬉しいようで悲しいようで・・・

こんな世界になったら皆様はどうしますか？

あなたは大切な人を殺しますか？それとも大切な人に殺されますか？

どちらにせよ 悲しい事にはかわりありませんね・・・

狂ってしまったても仕方ないでしょうかね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3301t/>

学園黙示録 -最後の願い-

2011年10月9日01時06分発行